流れ星

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れ星

【Ｎコード】
Ｎ８５７７Ｚ

【作者名】
景雪

【あらすじ】
リチャードはアメリカ西海岸で暮らす、９０を超えた老人。ある日、孫のマイクが、まだ父親のエドワードにも紹介していない日本人のフィアンセを連れて来る。マイクが真っ先に彼女を紹介しようとしたのは、リチャードがかつての戦争で、日本人と戦った経験を持っているからだった――

祖父と孫

「グランパ。紹介したい人がいるんだ」
孫のマイクは高い声が良く通る。リチャードはロッキングチェアーに深く腰を掛けながら、長年腕でこすられてすり減ったひじ掛けをゆっくりなでる。
「エドにはもう紹介してあるのか？」
父親、エドワードの名前を聞き、マイクはうつむいて何も言葉を発することができない。結婚相手を紹介するならまずはエドだろう。そう思ったがリチャードは言葉にしなかった。マイクが敢えて一番に自分のところに来たのは、何か理由があってのことだと思ったからだ。
「フィアンセか」
「……うん」
すぐに返事をしないのは、後ろめたい何かがあるのだろう。エドよりも先に私に紹介しようと思ったのもそのためだろうか。リチャードはロッキングチェアーを揺らしながら思った。
「連れて来い。いるんだろう？　玄関の外に」
「……うん」
マイクはゆっくり後ずさりすると、玄関の外に消えていった。玄関の戸が開いて一瞬、外の光が目をくらませ、リチャードは長く伸びた眉毛で瞳を閉ざすように眩さを防いだ。近所に住んでいるとはいえ、早起きが苦手なマイクが午前中に訪ねて来ることは珍しい。リチャードは陽がほとんど入り込まない部屋の、分厚い暗がりにぼんやりと視線を合わせていた。そうこうしていると再び戸が開き、光がすっと差し込み、光の帯は段々と太くなっていった。部屋にこもっていた埃が舞い、それが照らされ細かい粒となって漂った。
「グランパ。ミス・ヤマダだ」
「はじめまして。キョウコ・ヤマダです」

リチャードは皺の深く刻まれた瞼をほとんど横一線に閉じ、突然飛び込んできた外界の明かりに視野を奪われてしまったが、「ヤマダ」というファミリーネームと、訛りの強い英語はしっかりと聞き取ることができた。

「グランパ。彼女は日本人だ。だからグランパに最初に紹介したかったんだ」

緊張している時、マイクは高い声が一層高くなる。リチャードはまだぼんやりとしか見えない視界に二人の人影を捉え、眼球を包み込むように三回強く瞬きをした。

「グランパが戦争で日本人と殺し合ったことは知ってる。でももう昔とは違うんだ。彼女には何の罪もない」

やっと焦点が定まったリチャードの瞳に、細身で髪の長い東洋人の女が映った。自分の居場所を探せずにいるのか、いつになく饒舌なマイクとは対照的に、彼女はうつむいてじっと黙っている。

「彼女は、ロマリンダ大学の同級生なんだ。グランパの後輩だよ」

そこまで聞いて、リチャードはおもむろに立ち上がった。口を開こうとしないリチャードが日本人のフィアンセに怒っているものと思い、マイクは慌てて次から次に様々な言葉をかけた。けれど祖父は黙ったままで、二人の姿が見えないのかまっすぐに家の外に向かった。ミス・ヤマダは高齢の割に大柄なリチャードを、後ずさりして大げさによけた。

「グランパ。聞いてくれよ」

マイクを右の掌で制し、リチャードは言った。

「マイク。ミス・ヤマダ。時間はあるか？　ちょっと行きたいところがある」

「え？」

「時間がかかるぞ。いいか？」

「うん……夏休みだから時間はあるよ」

マイクは短く返事をし、ミス・ヤマダも遠慮がちに頭を縦に振った。

リチャードは同じように口を開けたまま彼を見つめる二人を尻目に、九十を過ぎても衰えない足取りで海岸に向けて歩く。真夏の西海岸は雲が多いが、切れ目からは薄く気持ちの良い青が覗いて好天を告げていた。

「グランパ。どこに行くんだい？」

「後で話す。とりあえず船に乗れ」

「え。クルーザーで行くのかい？」

「船に乗られるんですか？」

ミス・ヤマダの問いかけにリチャードは答えない。代わりにマイクが答えてくれることが良く分かっているからだ。

「グランパは若い頃からずっと船に乗っているんだ。世界一周もしたことがあるんだよ」

「すごい」

「今じゃ年寄りの道楽だ。食料と飲み物を積もう」

最初からそう決まっていたかのように、三人は分担して準備を進め、まだ太陽がてっぺんまで昇る前に西海岸を発った。

海は濃く、緑と青を凝縮していた。徐々に離れていく西海岸の街並みは、山肌のように密集した建物の所々に高いビルが突き出て見えた。

「どこに行くの？　ハワイ？」

「焦るな。長い船旅になる」

操縦席でハンドルを繰るリチャードの斜め後ろにマイクが立ち、すぐ後ろの席にミス・ヤマダが腰をかけた。リチャードの操縦は的確で、六十年培った経験は皺の一本一本にまで染み込んでいる。

街が見えなくなってから、リチャードはゆっくりと口を開いた。彼の操縦に安心したのか、マイクもミス・ヤマダの隣に座っていた。

「マイク。わしが戦争に行った時の話をしたことはなかったな？」

「……うん」

てっぺんまで昇った太陽は強烈な日差しを海面に注ぎ、照り返し

が操縦席の窓から時折入りこんだ。リチャードはサングラスのつるを握って位置を直した。

「あら。随分古い聖書」

ミス・ヤマダが彼女の側に置いてあった聖書を見つけて手に取った。背の部分が崩れそうに古い物で、表紙にはくすんだ染みができていた。

「それはグランパがいつも大切にしている聖書だよ。美人のシスターにでももらったんじゃないの？」

そう言って笑うマイクの声など少しも気にせず、リチャードは船の進行方向を見据えたまま二人に言った。

「ちょっと長くなるが、退屈しのぎに聞いてくれるか？　勿論、ミス・ヤマダも」

二人は「うん」「はい」と同時に返事をした。それを聞いてリチャードは乾いた唇を舌の先で湿らし、数秒の間を置いて話し始めた。

カズオ・タニグチ

リチャードが生まれた南カリフォルニアは当時急速に発展していたロサンゼルス、サンディエゴ、サンフランシスコといった大都市を有し、人口の増加に伴い医療機関の充実、医師の増加が求められていた。リチャードがロマリンダ大学で医学を専攻することになったきっかけはまさに、そういった需要に応え、医師として州に貢献したいと思ったからだった。カリフォルニアは合衆国で一番大きな州だから、外国から学びに来ている学生も多かった。カズオ・タニグチも日本から留学に来ている学生だった。

丸顔でいつも眼鏡をかけているカズオは、あまり口数が多くはなかったが真面目な学生で、敬虔なクリスチャンでもあった。彼は進んだ医療技術を習得し、祖国に還元するためにアメリカに来ていた。韓国の併合、満州国の建国、急速に中国での利権を拡大している日本を、リチャードは快く思っていなかった。であるからカズオに最初会った時も、眼鏡の奥にひっそりと覗く彼の目の細さを、侮辱の気持ちでもって一瞥した。リチャードの肩ほどしかない背の高さ、長い胴と短い手足も、自らが生まれ持った血筋に優越感を抱くのに十分だった。

リチャードはポールという背の高い同級生と仲が良かった。ポールは男前で口が上手かったから、いつもガールフレンドと一緒にいた。ポールは表面上、気さくで良い男だったが、強い酒で女を酔わせていたずらをするようなこともあり、あまり素行は良くなかった。

ある日、リチャードとポールは同じ学部の女学生二人を誘って地下の酒場で酒を飲んだ。女学生の内の一人がユリコ・マツオカという日本から来ている学生で、ポールは最初から彼女に目をつけていた。「ジャップの野郎は嫌いだが、女は特別だ。どんな物が付いているか、一度確かめるのも良いだろう？」それがポールの口癖だった。リチャードは積極的に彼に加担しようとは思えなかったが、だ

からといって日本人の女に同情する気もなかった。
ここで飲む物は任せてくれと、ポールは甘くて飲みやすく、アルコール度数の高い酒ばかりを二人の女に飲ませた。どこからどうやって引っ張り出してきたのか、次から次に出てくるポールの話に二人の女学生は引き込まれ、お代わりを頼むまでの時間が目に見えて短縮された。五杯も飲むと二人の女は千鳥足になってしまい、当初の目的通りにポールはミス・マツオカの肩を抱きながら先に店を出て行った。リチャードはもう一人の決して美しいとは言えない白人女を成り行き上仕方なく連れて歩くことになった。白人女は、彼女の実家で飼っている肉牛の筋肉が逞しいことを、通行人が顔をしかめて振り返るほどの大声で延々と語り続けた。元からほんの少しも興味がなかったので、リチャードは彼女をタクシーにほとんど押し込んで家に帰し、また夜のビジーストリートを目的もなく歩いた。すれ違う男たちは何故だか軍隊に身を置いていることを、通行人が顔をしかめて多く、リチャードはその顔を見る度に唾を吐きかけてやりたい衝動にかられた。リチャードが最も嫌う職業が軍人だった。危険に身を晒しているという自己陶酔からか、軍人以外の人間の前で必要以上に横柄になる態度が気にくわなかった。
適当に目についたバーで安酒をあおり、無駄に時間を費やしていると、もうとっくに深夜だというのに何やら騒がしい声がしたのでリチャードは表の通りに出た。なんとそこには人ごみに囲まれて対峙するポールとカズオ・タニグチがいた。二人は汚い言葉を投げながら罵倒し合い、今にも格闘を始めんとしている。周りを囲むがらの悪い者たちがさかんに煽り、ほとんどの者が「やっちまえ！」とか「ジャップを殺せ！」とかポールを味方している。六フィートを優に超えるポールと五フィートと少しのカズオ・タニグチが向かい合えば、周りが応援しなくとも勝負の結果は決まりきっているように思えた。
「何故ミス・マツオカを傷つけた！」
「彼女の方から誘ってきたんだ」

「ふざけるな！　日本では結婚前の女子は貞操を守るんだ！」
「ここはアメリカだぞ！　黄色い猿が！」
カズオ・タニグチは“黄色い猿”という台詞が許せなかったのか、勢いをつけてポールの方向に踏み込んだ。ギャラリーが拳を突き上げて「やれ！」「いいぞ！」と叫ぶ。ポールが狙いを定めて右の拳を突き出す。カズオ・タニグチはポールの拳を俊敏な動作でもってかわし、拳が空を切ってのけぞったポールの懐に入ると、姿勢を低くして腰の上に器用に彼の大きな身体を乗せ、回転させて投げ飛ばした。背中から石の地面に叩きつけられたポールは、声も出せないのか顎を大きく突き出して息だけを荒く何回も吐いた。
「今度、彼女に同じことをしてみろ。二度と女を抱けないようにしてやるからな！」
カズオ・タニグチはそれだけ言い残して革靴を打ち付ける音を響かせながら去っていった。あれほど興奮していたギャラリーは体温が一度も二度も急激に下がったのか、どうでもいい捨て台詞を口々につぶやきながら散らばっていった。物静かな姿しか知らないカズオ・タニグチの、感情を沸騰させる様をリチャードはすぐにそのまま受け入れることができなかった。涼しさが多く含まれるようになった九月の夜風に、上着の半袖から出たままの肌を吹かれ続け、リチャードは身振るいを一つした。
翌日、まだ痛むのか背中を丸めながら登校したポールに会い、リチャードは昨日の顛末を聞いて驚愕と言うよりはあやうく噴き出しそうになった。
「ミス・マツオカのアパートに行って、ベッドに押し倒したら股間を思いっきり蹴り上げられたんだ。更に彼女は日本のカタナを抜こうとするんで、俺は股間を押さえながら慌ててアパートの外に出て、カズオ・タニグチにばったり会ってしまった」
「災難だなあ。お前」
「人ごとだと思って……」
リチャードとポールがそんな会話をしながらキャンパス内を歩い

ていると、向かいからカズオ・タニグチとミス・マツオカが並んで近付いてくるのに気付いた。ポールは咄嗟に身体を横に向け進行方向を変えようとしたが、リチャードは彼の太い腕をつかんで元の位置に強引に引き戻した。

「やあ。クラスメイト」

カズオ・タニグチはポールに向けて右の掌を差し出した。ポールは視点をどこに定めれば良いのか戸惑っている風だったが、リチャードが膝で軽く小突くとその掌を取った。二人はお互いの掌をつかみ、二回強く上下に振った。ポールははにかんでいるのかしかめっ面をしているのかすぐには分からない表情をしていたが、カズオ・タニグチは歯並びの良い前歯を覗かせながら明らかに笑顔と分かる顔を見せていた。リチャードはその時初めて、日本人に対し人間として接することができるような気がした。

友

ポールはカズオ・タニグチに柔道を習った。柔道は重心が低く腰から下が短い東洋人の方が上達しやすい。しかしポールは生まれ持った抜群の運動神経で地道に技を磨いていった。得意技は“ハライゴシ”だとポールは得意気だった。「マイリマシタ」「オネガイシマス」ポールが覚えた最初の日本語はこの二つだった。

リチャードとポールはカズオ・タニグチのことを“カズ”と呼ぶようになった。リチャード、ポール、ポールのガールフレンド、カズとミス・マツオカは五人で付き合うようになった。ポールのガールフレンドは度々変わったし、リチャードは余りそういった相手を作らなかったから何とも妙な集まりではあったが、少なくともポールのガールフレンド以外の四人は少しも気にしなかった。リチャードは、カズの話してくれる“ニッコウ”に強い関心を抱いた。カズは日本の“トチギケン”という地方の生まれで、ニッコウは彼の故郷に近い場所にあるという。二百七十年平安な時代を保ったその最初のサムライを祀ってあるのがニッコウだとカズは言った。寺があり、神社があり、雪を抱く山があるニッコウを、リチャードは幾度となく頭の中で描いた。国全体の歴史が百五十年を少し超したばかりのアメリカに生まれたリチャードは、たった一つの時代が二百七十年もある日本という国家に対し、抽象的な魅力を感じたがそれを言葉で表現することはできなかった。リチャードは必ずニッコウに行くことを決めた。サムライの霊に手を合わせることで、抽象的だった魅力が具体的になる気がしたからだ。

カズとミス・マツオカが結婚したのは、リチャード達がカリフォルニア州の医師になって三年後のことだった。一九三七年の日中戦争勃発で日本は世界的に中国侵略を非難され、一九三九年初頭には日米通商航海条約が失効した。しかしリチャードは自分達だけが日米間の軋轢とは無縁の場所にいる気がしていた。戦争がすぐそこま

で忍び寄ってきているようには少しも思えなかった。
カズとミス・マツオカの結婚パーティーは派手ではなかったが、二人を祝う友人の多さはカズとミス・マツオカの人柄を物語っていて、リチャードにとってもポールにとっても忘れられない一夜になった。普段は酒に対して自制できるリチャードは、飲むピッチを上げ過ぎ、酔いを覚ますためにパーティー会場の外で夜風に当たっていた。
「ディック。随分飲んだな？」
リチャードは友人の間でディックと呼ばれていた。
「ヘイ。カズ。はしゃぎ過ぎたよ」
目の前に人が見えているのに、その話している声が良く聞こえない体験は初めてだった。普段は余り飲まないウォッカを五杯も飲んだせいだと、うつろな脳でもってリチャードは思考した。
「来年、日本に帰ろうと思う」
カズが言った短めの一言が、現実の物なのか夢なのか、アルコールに程良く犯されたリチャードはすぐに判別できなかった。カズはリチャードの反応を待っているように、人通りが減ったウィークエンドのビジーストリートに敷かれた石畳を見つめていたが、おもむろに続けた。
「子供が大きくなるまでは、日本で育てたい。そしてまたアメリカに戻ってくるよ」
ミス・マツオカのお腹には、来年生まれてくる二人の子供がまだほんの小さい姿で生きていた。
「ニッコウを、案内してくれ」
「勿論。いいよ」
「俺は“アリガトウゴザイマス”と“ゴメンナサイ”しか言えない。君がいなかったら日本で迷子になってしまう」
「ああ。日光は秋か冬がいい。橙や赤に色づいた山々は美しいし、雪で白く染まった姿もまた良い」
リチャードがうんうんと大げさにうなずいていると、夜空を見上げ

ていたカズが言った。
「見てみろよ。流れ星だ」
「え？」
「ほら。ああ、見えなくなった」
「どこだ？　星なんて出ているか？」
「飲み過ぎだぞ」
カズの言葉に応えるようにリチャードは、決して大きくはないが筋骨がたくましいカズの肩に腕をまわし、普段より高い声を出して笑った。酒臭い息にカズは多少腰を引く素振りを見せたが、しかしすぐに返答の代わりにリチャードの腰を腕で叩いた。
ポールに最初に伝えたら大騒ぎされると思ったのだろう。帰国することをカズが最初に自分に伝えた理由がリチャードには分かっていた。学生の頃に比べれば不定期ではあるが、ポールは相変わらずカズを師範として柔道を習っていた。
カズが日本に帰ってしまうことを知ると、ポールは気の毒になるくらい狼狽した。リチャードが間に入っても少しも効果がなく、ポールは大きな身体を揺すって泣き始めてしまった。ミス・マツオカ――カズのワイフになったのだからミセス・タニグチ、もしくはユリコが正しいが――はもらい泣きをし、カズは何かを堪えているのか、薄い唇を固く横一文字に閉じて微動だにしなかった。

軍隊

海上はどこまでも穏やかで優しかった。餌でもくれると思ったのか、たまに海鳥が気まぐれでクルーザーに近付いてきたが、期待が無駄だと分かってすぐに飛び去っていった。

「カズとユリコ。グランパの良い友人だったんだね」

マイクは祖父の話をこんなに長く聞いたことがなかった。リチャードの話す口調の端々にあらゆる感情がぎっしりと込められているのを感じ、マイクは背中に冷水をたらされ続けるような妙な感覚を抱いた。

「素敵ですね」

ミス・ヤマダは短くそれだけ口にしたが、彼女の丸い瞳が水をためたように輝いているのを見て、祖父の前だというのにマイクはもう少しで彼女を抱きしめてしまいそうになった。

「ミス・ヤマダ。まだ先は長い。奥で休んでいなさい」

「ありがとう。ディック。でももう少し、お話を聞きたいわ」

「起きたら聞かせてあげよう。ゆっくり寝てもまだ十分話してあげられるくらい長い航海になる」

「分かったわ」

ミス・ヤマダはそう言うと素直に船内に降りて行ったが、「二人でお話進めないでね！」と念を押すのを忘れなかった。マイクは運転を交代するためにリチャードの脇に立つ。水平線に接する直前の太陽は、緩やかな波間の上に、輝く皺を幾重にも作っていた。

「グランパ。まさかカズとユリコに会わせてくれるの？」

ほとんど真横に立ってマイクがリチャードの顔を覗きこむように言った。リチャードは答えずにただ黙ってクルーザーの進行方向を見つめていた。リチャードの横顔は、弱い炎のような夕日に照らされ、温度のある光と影を作っていた。

目が覚めると、何もない海のはるか遠くに太陽が見えた。まだ落日していないのだろうか。そう思って腕時計を確認し、マイクは既に朝が訪れたことを知った。リチャードがかけてくれたのだろう、毛布を慌てて払って立ち上がり、マイクは操縦席に少しも変わらずに立ち続けているリチャードに声をかけた。

「グランパ。ごめん。寝ちゃったよ。代わるよ」

「休み休み運転したから問題ない。穏やかな朝だな」

海鳥が数羽鳴く声が雲の切れ間に広がった。朝日は周りの雲を次々に自分の色に染めていき、船は徐々に朝の明るさに包まれていった。リチャードはマイクと操縦を代わり、操縦席に近い場所に腰を下ろした。

「グランパ。方向は合っているの？」

船舶免許を取得したばかりのマイクが海図から現在地を何とか割り出しながら聞いたが、リチャードは座ったまますぐに眠りに落ちたのか返事はなかった。マイクは海図に描かれた矢印通りに舵を保った。矢印の先はまだ未記入であり、目的地がどこであるかは分からなかった。

「おはよう」

ほつれた髪を指でときながらミス・ヤマダが顔を出すと、大して眠っていないのにリチャードは起き上がった。「グランパ。寝てていいよ」「ああ。休んでいるから平気だ」そんなやり取りをしている二人にミス・ヤマダが加わり、マイクは電気で沸かしたコーヒーを彼女に勧めた。太平洋の真っただ中で迎える朝は真夏とはいえ肌寒く、ミス・ヤマダは舌が焼けるようなコーヒーを有難がった。彼女は両手ではさみ込むようにマグカップを持ち、熱を少しでも体内に取り入れようとしていた。太陽が水平線から離れ、空の明るさが早朝のそれではなくなってから、ミス・ヤマダは十分体温が上がったのか口を開いた。

「ディック。あの古い聖書、何か書いてあった」

それを聞くとリチャードは閉じていた瞼を短く痙攣させるように反応を示したが、瞼は開けなかった。舵を握るマイクが横目でリチャードを見た。

「日本語で、日記のような内容だった」

リチャードは目を閉じたままだ。

「随分古い日本語で全部は読めなかったけど、多分カズが書いたものだと思う。違う？」

音も立てずにリチャードは目を開けた。しばらくミス・ヤマダの黒い瞳を見つめ、彼女の問いかけには答えずに話し始めた。

＊　＊　＊

カズとユリコが日本に帰ってからすぐに、世界を取り巻く空気はどんどん重く息苦しくなっていった。ヨーロッパではドイツがポーランドを攻め、パリが陥落した。アジアでは日本が仏領インドシナに侵攻し、石油の輸出停止など諸外国から日本は追い詰められていった。アメリカは不干渉主義を貫きそのどちらにも積極的に関わろうとはしなかったが、これ以上不干渉を続けることはできない、というところまで来てしまったのが一九四一年だった。リチャードはポールを誘って行きつけの酒場に行ったが、その日は酒が腐っているのかと疑うほど全く酔えなかった。

「ディック」

「ああ」

「俺は、軍隊に行こうと思う」

この日誘ったのはリチャードの方であったが、実は彼も軍医になることを決心していた。ポールに先に言われてしまったことになる。

「実は俺も、軍隊に行こうと思う」

「そうか」

二人はしばらく見つめ合い、右の掌を握り合った。リチャードは、あれ程軍隊が嫌いだった自分の急激な変化に戸惑っていたが、ポー

ルも同じことを考えていたかと思うと戸惑いはだいぶ薄らいだ。二人は、ドイツ軍が破竹の快進撃を続けるヨーロッパ戦線について語り合いながら、やがて自分達はヨーロッパのどこかに行くのだろうかと想像した。一度だけ旅行したことがあるパリの街並みがどう変わってしまったかに想いを馳せると、リチャードは気分が沈んでしまい酔えない安酒を更にあおった。

「カズ、どうしているかな？」

ポールのその言葉は沈んだ気分を払い去ってくれた。

「元気にやっているだろうよ。彼は日本人だ。日本にいれば安全だ」

カズがアメリカに残っていたら……リチャードはアメリカ国内の日系人が追いやられている立場を思い、そう言った。

「そうだな。ユリコも元気にやっているだろう」

カズが祖国に帰国した翌年、子供が生まれたことを知らせるハガキがリチャード達に届いたが、それっきり便りは途絶えていた。“ニッコウ”を案内してもらうのはまだ先になってしまうかもしれないな。リチャードは氷が溶けて上澄みが薄くなってしまったバーボンのグラスを見つめながらぼんやり思った。

リチャードはポールと同じ養成機関で軍医になる訓練を受けた。軍隊特有の厳しさや理不尽さはそれほど経験しなかった。軍医という特別な役職という理由だけではなく、軍隊に属する人間を一人でも多く作り出さなければならない切迫した状況を如実に表していた。

やがて日本が真珠湾を攻撃しアメリカは第二次世界大戦に参戦した。アメリカに住む多くの日系人が強制収容所に入れられ、日本は本格的にアメリカの敵になった。リチャードとポールは訓練の間にカズやユリコについて話すことがあったが、他の誰にも聞かれないよう小声で話さなければならないくらい、米日関係は悪化していた。

「カズも軍医になっていたりしてな」

「ユリコも軍医で仲良く夫婦軍医か」

二人はかろうじて冗談を言い合う余裕は持ち合わせていたが、ヨーロッパでのドイツの勢いと太平洋での日本の勢いは共に止まらず、心の決して一部分とは言い切れない領域に焦燥と不安と落ち着きのなさを抱かずにはいられなかった。アメリカ西海岸には日本軍が上陸するという出所がない情報が度々飛び交い、国民は精神的に疲弊させられていった。日本軍は英領香港、英領シンガポール、蘭領インドシナ、米領フィリピンを占領し、太平洋の多くの地域に日の丸が翻った。アリューシャン列島のアッツ・キスカ両島も日本軍に占領され、両島はアメリカ領であることがほとんど知られていない絶海の孤島であったのだが、米国領に日の丸が翻った事実にほとんどのアメリカ国民が屈辱に打ち震えた。

日本軍の勢いが一気に失速したのは一九四二年六月から八月にかけての珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島の戦闘だった。それまでほとんど無敵だった日本海軍の機動部隊は二つの海戦で空母五隻を喪失し、ガダルカナル島の陸上戦では盧溝橋事件で名を馳せたカーネル・イチキを支隊長とする日本陸軍最強の一木支隊が全滅した。米豪連絡網を断つ目的でニューギニア攻略を企図した日本軍は、日本本土の二倍以上で、その面積のほとんどを人跡未踏のジャングルが覆うニューギニアに翻弄され、数万人の兵士、大量の軍事物資をむざむざと浪費していった。戦争当初の日本軍は恐ろしいほどに強かったが、手を広げ過ぎた。広大な太平洋に手広く兵力を分散する余力を、日本は持ち合わせてはいなかった。日本軍を打ち負かしていく度に、アメリカ国内は沸きたち、戦意は高揚していった。一九四三年四月、アドミラル・ヤマモトを殺害したことが報道されると、彼がパール・ハーバー奇襲の立役者だったからアメリカ人は老人から子供までお祭り騒ぎをするように祝った。

リチャードとポールは同じ歩兵部隊の軍医将校として配属されたが、訓練と言える訓練もせず、戦線からははるか遠い場所で過ごしていたので、今、戦争が行われていることを忘れてしまえた。二人にとって、カズと同じ肌や瞳を持った人間が、鉄帽と小銃で武装し

て襲いかかってくる情景を思い浮かべることはできなかった。金髪で無口で面白味も何もないドイツ人を相手にした方が、いくらか戦争を体験している気分に浸れるような気がしていた。二人が広い世界のどこで戦争の一端を担わされるのか、まだ情報のかけらさえ教えてもらえなかった。

戦場へ

あれほど強かった日差しはいつの間にかすっかり消え、クルーザーの周りには霧が現れるようになった。船が進むごとに霧は徐々に濃くなっていくように思え、未だ行先を告げられていないマイクとミス・ヤマダは、濃さを増す霧に一層不安感を募らせてしまった。気温が下がってきたので三人は冬に着るような厚手のジャケットを羽織った。マイクはたまらず、「どこに向かっているんだい？」と聞いてみたりするが、リチャードは「もうすぐ話す」と答えるだけで満足のいく回答は得られなかった。リチャードとマイクは計器を頼りに航行を続けたが、日の出も日の入りもはっきりとしないので一体今が何日なのかさえ分からなかった。一面霧に包まれて視界が一切きかなくなってしまった四方を怯えるように振り返るミス・ヤマダの不安を少しは和らげるように、リチャードは舵を握りながら話の続きを始めた。

＊　＊　＊

リチャードとポールが輸送船でアリューシャン列島に向かうことを告げられたのは出撃一週間前だった。二人は慌ただしく家族や友人との再会を果たし、軍人の端くれたる意識を急速に準備し、身支度を整えていった。二人には悲壮感や諦観といった感情はなかった。自分たちは銃を持って最前線で戦うことはない軍医であるという自覚と、訓練を共にした屈強な兵隊たちが一緒だという安心感があったからだ。乗船する直前、当時日本名で熱田島と呼ばれていたアッツ島が攻撃目標だと知った。同島の日本軍守備隊約二千五百名と攻略部隊の米陸軍第七師団一万一千人との数の差を再確認し、リチャードもポールも戦闘は短期間で終了すると思い、自分たちの出番はあまりないかもしれないとお互いの顔を見合わせた。

上陸前の艦砲射撃は凄まじかった。二隻の戦艦を主とした大口径砲弾を嫌というほど叩きこみ、砲撃の音で聴覚に異常をきたす兵隊、精神的に不安定になる兵隊が続出し、リチャードたち軍医は初っ端から大忙しだった。睡眠薬が危うく足りなくなる心配があったので、後方に控えていた輸送船から急遽予備の睡眠薬を調達しなければならなかった。

「今が一番忙しいだろうな。だって、あれだけ撃ち込めばもう生きている者はいないだろう？」

リチャードは砲弾のせいで形が変わってしまった島影を、硝煙の向こうに指さした。ポールも同じ気持ちなのか、ただ黙って指のさす方向を見つめていた。

アリューシャン列島は一年を通して霧が多く、アッツ島の上に太陽が降り注ぐのは年に十日もないと言われていた。濃霧の中、無理に上陸しようと思えば、上陸用舟艇同士が衝突してしまったり、上陸目標を大きくはずれる可能性がある。アメリカ軍上陸部隊は洋上で待機し、好天を待つしかなかった。

霧が少し晴れた一九四三年五月十二日、主力部隊が上陸に成功した。日本軍陣地からは散発的な砲撃はあったが、生き残りの兵士がまだいるのだろうと上陸部隊は余り気に留めなかった。リチャードとポールもこの日に上陸し、簡易的に造られた陣地の一角に臨時野戦病院を開設した。まだ霧が晴れ切っていない島には植物がほとんど生えておらず、地獄というのはこういう景色なのだろうかとリチャードは思った。たまに敵陣から聞こえてくる小銃の小さ過ぎる発射音は、消える直前の蝋燭の灯火に思えた。

身体の先から凍っていくかと思えるほどアッツ島の夜は寒かった。真冬用のコート、手袋、ブーツを履いたまま横になったがうとうとさえできなかった。無理矢理閉じていた目を少し開けてみると、隣に横たわるポールも同じように薄目を開けていた。「寝られないのか？」「ああ」二人は声には出さないが目で合図をした。

その時、雄叫びのような奇声が寒空を引き裂いた。叫び声やうめ

き声、怒声や罵声が続く。味方の小銃音が数発鳴り、やがてまた夜の静けさが戻った。硝煙がいつまでも漂っていて無性に鼻についた。
サーチライトが照らされると、五、六人の日本兵と三人のアメリカ兵が倒れているのが見えた。アメリカ兵の一人はうめき声をあげていたのでリチャードは駆け寄り、急いで応急手当を始めた。他のアメリカ兵二人はもう息がない。死んだ二人の兵隊の瞼をリチャードは閉じてやった。
別のうめき声を聞き、ポールは全員死んでいると思っていた日本兵が一人だけまだ息があることに気付いた。腹に大きな穴が開き、血が止まらないのでもう長くはない。しかし日本兵は何かを訴えようとしているのか、顔を歪ませ口元から色の濃い血を吐きながら必死に口を動かしていた。ポールは自らの顔を日本兵の顔に近付けて聞く。「ナンダ？」彼は日本兵の口元の側まで耳を近付けた。
「ドクター。どいてくれ」
振り返ると、顔見知りの陸軍兵が日本兵に小銃を向けて立っていた。表情は驚くほど冷静で、それが逆に恐ろしく感じた。
「おい、やめ……」
ポールが言い終わらないうちに陸軍兵は引き金を引き、銃声が二発響いた。銃弾が撃ち込まれる度に日本兵の身体は波打ち、二発撃ち終わるとそれ以上一切動かなくなった。
「デビットもサムも殺されたんだ。ドクター。あんたはジャップの味方なのか？」
陸軍兵はそう吐き捨てると大げさに足音を鳴らしながら背中を向けた。ポールがリチャードの方に視線をやると、リチャードは、一目で力を入れていないことが分かる振り方で首を振った。殺されたアメリカ兵は心臓や胸を銃剣で一突きにされており、黒く粘度の高い血が雪を染めた。まだ陣地もろくに造れていないので、もっと大勢の日本兵が襲ってきたら桁違いの死傷者が出たことをアメリカ兵の誰もが理解した。リチャードは腰の拳銃を抜き、操作方法を忘れてはいないかシミュレーションした。幸運にも身体は操作手順を全

て覚えていたが、止まらない右手の震えのために、拳銃の金属部分がカタカタと嫌な音を出した。

静まり返った寒空に遠方から声が聞こえた。声は弱くこだまし、日本語であるので全てを理解することはできなかったが、語尾の「ヤンキー！」という一言で、自分たちを罵倒する声だとアメリカ兵は理解した。「ジャップス！」アメリカ兵の一人が唾えていた煙草を吐き出しながら叫ぶと、声は同じようにこだまして小さくなっていった。

連隊長の死

上陸前の艦砲射撃はほとんど効果がなかったことを、アメリカ兵たちは翌日思い知らされた。

リチャードとポールが所属する第十七連隊を主力とする米軍上陸部隊が上陸したのは、島南東部のマサッカル湾だった。マサッカルとは虐殺のことで、十八世紀にロシアが原住民のアリュート人を虐殺したことに由来する。日本軍はここを旭湾と呼んでいた。

先遣隊が日本軍陣地を急襲すると、日本軍はろくな抵抗もせずに余りにもあっけなく敗走した。高射砲陣地には無傷の高射砲と弾薬、糧食、野菜を栽培している箱が放置されていた。米軍兵士たちは固く縛っていたヘルメットの顎紐を緩め、楽な戦いになることを喜び合っていた。しかし、第十七連隊連隊長アノール大佐は、口元をきつく結んで厳しい表情を崩さなかった。上陸前にあれほど砲爆撃を加えたのに陣地は健在であり、高射砲も旧式であるが隅々まで手入れが施され金属部品が潤滑油で輝いていた。

「油断するな。敵を侮るな」

アノール大佐の忠告を真剣に捉える兵士はほとんどいなかった。

日本軍が荒井峠と名付けた地点に達すると、三方向からの砲火にさらされた米軍上陸部隊は逃げ場を失い、兵士は次々に倒れていった。山岳地帯が多くを占めるアッツ島は、砲爆撃の威力を削ぐ陣地を構築しやすい。山の中腹に造られた陣地からは、下から登ってくるアメリカ軍が丸見えだったろう。一旦撤退し、ほぼ無傷で生き残っていた日本軍守備隊は、大して姿勢を下げることもせずに進撃してくるアメリカ軍をあざ笑うかのように、引き付けるだけ引き付けて大砲や機関銃をありったけ叩きこんできた。日本軍からの銃撃を避けるために地面に伏せても、凍土であるため長時間伏せていることができない。起き上がった途端に狙撃され、一人また一人と兵士は命を散らせていった。

アノール大佐は劣勢を挽回するため、敵の陣地を偵察する斥候隊と共に最前線に赴く決心をした。参謀や直近の士官は皆反対したが、大佐の信念は揺るがなかった。

「指揮官がのうのうと後方にいてはだめだ。私が先頭に出て兵に範を示す」

大佐が連隊本部を出発して二百メートル程の地点で、数発の銃声がした。米軍陣地を偵察に来ていた日本軍斥候が放った小銃弾だった。その内の一発がアノール大佐の頭部に命中し、大佐は背中から凍土に倒れ込んだ。リチャードとポールが緊急招集を受けたが無駄だった。大佐は即死した。

日本軍による夜襲も毎晩行われた。霧のために月も星も見えない真っ暗闇の中、寒さに凍える米軍兵士は、「バンザーイ！」という叫び声を聞いた途端に戦意を喪失した。日本軍兵士が携える小銃の先に着けられた銃剣が、無駄にギラギラと輝いて不気味だった。

沖に控える戦艦や巡洋艦が全弾を日本軍陣地に撃ち込んだ。爆撃機による爆撃、揚陸した百五十五ミリ砲による砲撃も実施した。しかしそれでも荒井峠を守る日本軍の勢いは衰えなかった。山の上から降ってくる敵の銃弾が霧を切り割いて光って見えた。負傷者が続出し、リチャードとポールの仕事は急激に増えていった。

米軍の猛攻を六回に渡り防いだ荒井峠の日本軍は、壊滅的な損害を被りながら五月十七日夜間に撤退した。日本軍撤退の知らせを聞き、翌十八日に日本軍陣地に踏み込んだリチャードは、小銃の銃口を口にくわえ、足の指で引き金を引いて絶命している兵士を見た。足に重傷を負っており、撤退することができずに自決したようだった。兵士はほとんど肉がついておらず、気の毒に思えるほどやせ衰えていた。

「生きている者はいないか？　捕虜にして情報がほしい！」

米軍将校の叫ぶ声が陣地にこだました。そこには硝煙と血の臭いが漂っているだけで、息のある日本軍兵士は一人もいなかった。戦死した中隊長の一人であるジャーミン大尉の名前をとり、米軍はこ

の地をジャーミン・パスと呼んだ。
日本軍は後退を続け戦線を縮小していった。米軍は増援も得て数の上で圧倒的に優位に立ち日本軍を包囲した。三日で落とせると言われていた割には占領に時間がかかっていたが、頑強な日本軍の抵抗は日を追うごとに確実に弱まっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8577z/

流れ星

2012年1月1日00時49分発行